

【書評】

石井伸男著「マルクスにおけるヘーゲル問題」  
(御茶の水書房、2002年)

竹 内 真 澄

Masumi TAKEUCHI

1. はじめに

「本書の構想は、ほぼ30年前までさかのぼって・・・はじまる」(あとがき)とある。ずいぶん長く(だらだら?)やってきたものだ、と効率主義者は笑うだろう。反対に、さすがは学者だ、「この道一筋」こそ学問の王道と誉める人もいるだろう。

しかし、この30年間にはまったく別の意味がある。1942年生まれの本著者は、60年代に、したがって、なおマルクス研究がスターリン主義の影響をまぬがれえなかった時期にこのテーマに着手した。そして、60年代末からの政治的激動の中で、自己の関わってきた運動を反省し、60年代末以降のマルクス・ルネッサンスの成果を踏まえながら、さらに、90年代以降の、マルクスの何度目かの「死」を乗り越えて、このテーマを高い水準でまとめた。

もし「効率主義的」にやるならば、「マルクスは死んだ」で終わらせることもできた。ぎゃくに「この道一筋」でやるなら、アカデミズムが許す惰性でこのテーマに徹することもでき

た。しかし、幸か不幸か、著者はそれらのどちらも選ばなかった。何故か?

著者は「一見迂遠な原理的研究よりももっと社会的実践に意義がある方面の仕事に関心が向く」ようなナマナマしい面をもち、同時に、それにもかかわらず「半端でない勉強をしない」という自己点検の原理性に執着するような人物である。

著者は、マルクス主義が流行していた頃に、マルクス研究に異物混入を感じ取り、マルクス主義が捨てられてゆく頃に「現代ははまだマルクス思想の射程にある時代である」(123ページ、1983年の発言)と感じている。つまり、この30年間の世間のマルクス主義にたいする風潮の盛衰に抗して、むしろ、マルクスにおけるヘーゲル問題の総括の未完がこのような盛衰の思想的根源にあることをますます見定めていったのである。したがって、この生きた軌跡から同時代人すべてがなんらかのインパクトを受けないわけにはいかない。

評者は哲学の専門家ではなく、マルクスに若干の関心をもつ社会学者にすぎない。だから、

とくにヘーゲル研究の面ではおよそ書評する資格はないと自認している。だが、本書の書評を依頼されたとき、これは断ってはならないと直感した。なぜなら、本書は、その哲学的なタイトルにもかかわらず、類似の哲学書とは違って、徹頭徹尾「社会」的であり、そのことによって哲学的であろうとしているからである。社会的即哲学的という思考構造を学び取るにはうってつけの著作ではないか、それを学びたいというのが評者の動機である。

## 2. 小主題について

さて、内容は「弁証法」「唯物論」「意識」「個人」の4つの小主題ごとにまとめられている。1972年から1992年までの既発表論文に、新たに序章「マルクスにとってヘーゲル問題とは何であったか」と第三章2「フォイエルバッハにおける意識と対象」を書き下ろしたという。

### (1) 序章

まず、「序章 マルクスにとってヘーゲル問題とは何であったか？」は、全体を大きくりにするマルクスの思想形成の小史である。焦点は、弁証法と唯物論がいかにしてマルクスのヘーゲル批判の中で相即的に引き出されるか、である。スターリン主義は「弁証法的唯物論」という足し算のパッケージをつくったのだが、これでは駄目だということが本章からよくわかる。観念論にたいして唯物論を対置し、形式論理学に対して弁証法を対置し、対置したものと士を足し算するというのがいわゆる「唯物弁証法」であった。しかしこういう「足し算」はマルクスとは無縁である。マルクスのばあい、弁証法を貫

けば唯物論へ飛び出し、唯物論を徹底すれば弁証法へ行き着かざるをえないような、そのような内通の道を進む。それを著者は解明する。

初期の例で言うと、1843年頃、フォイエルバッハの「主述の転倒」論に影響されたとき、マルクスがフォイエルバッハで満足しないところである。フォイエルバッハはただ「転倒」をひっくり返して事足りりとする。だが、ヘーゲルの論理は述語から出発して主語を一契機とするのだから、これを批判するばあい、ただそれをひっくり返すだけでは、述語の神秘化された実体がなぜ当の主語から発生するかはわからない。著者によれば、マルクスは、フォイエルバッハだけでなく、むしろアリストテレスの主述述語論を下敷きにして（これは新しい指摘だ）、主語の置かれた構造からその神秘化された述語が不可避的に生まれる生成の論理をつかみ直している。このために、ただ感性的な主体に戻るといふフォイエルバッハ的唯物論を越えて、なぜ、この主体が様々な神秘的幻想を分泌するのか、近代的な主体の矛盾構造が取り出されるところまで進んでいくのだ。ここに唯物論と弁証法の内通の道がある。

これは決して1840年代や初期マルの解読にとどまらない。少し脱線するが、たとえば鈴木宗男代議士がNGOにたいして、「おまえらにわたす金は政治が集めていることを忘れるな」という意味のことを述べたとされた。著者ならこれをどう考えるか？国家の方を自立した主体にしておいて、それを選んだ市民や市民社会の団体に高圧的に臨む、そして実はそうした奇妙な政治を繰り返し産出するのがブルジョア社会なのである。抽象的な唯物論（金集めの政治）と抽象的な唯心論（金を配る政治）の相互定立が

「宗男」現象を生んでいる、とつかむだろう。たんに政治汚職の問題としてでなく、哲学上の問題として受け止めるのが本物の哲学者だ。そして、課題はただ「きれいな政治」を対置することではなく、なぜ、「宗男的」なものが生まれ、しかも自立化し、市民社会にたいして君臨するに至るのかなのである。

マルクスが闘争している1840年代の現実現代に連なっている。眼前の複雑な現実から出発し、それをある哲学的な固有の問題として受け止め、掘り下げて、唯物論と弁証法を鍛えなおす、という課題は未完なのである。

さてそのうえで、著者は、マルクスの思想遍歴から、社会変革(現実の発展法則)の弁証法と概念把握の方法(学的展開の論理)としての弁証法を引き出し、きびしく区別する。マルクスは1850年代前半まで主として前者を考え、その後になって後者を考えるようになるという。この区別は非常に有益なものである。

推測だが、著者も「活動家」としては現実の発展法則の弁証法を重視してきたのだが、「学者」としては学的構成の弁証法への関心を強めたのではないか?二つの弁証法の区別の裏に、著者自身の転回=展開がありそうに見える。

それはともかくとして、なおここには謎がある。なぜ、マルクスにおいて、現実の発展の論理から区別された学的展開の論理としての弁証法への関心が登場したのか、という謎である。著者はマルクスが学を体系化する必要に迫られたからだ、と考えているようである。だが、それだけなのか?社会変革と学の体系化という、一応は別々の課題に応じて、つまりは、社会を変えるためには前者を、本を書くためには後者

を必要としたからなのだろうか。これではあまりに外在的だ。著者の弁証法の区別は正しいけれども、十分に弁証法的でないのではあるまいか。

評者は、ここに関心を払う。すなわち、現実の発展の論理としての弁証法で解けるのは、いわゆる「対立物の統一と闘争」というふうに従来まで言われてきた弁証法観にもとづいて近代社会分析をおこなうことに尽きる。しかし、実は、これだけで変革の弁証法は完結しないのである。というのも、ここからは一種の「歴史主義」は帰結するが、それ以上ではないからだ。言い換えれば、「歴史主義」のみでは社会を「歴史主義」化できない。何故か?それは、ある社会の編成は、つねに前代からの歴史的な発展の論理の結果としてあるわけだが、にもかかわらず、それは独自の中心をもち、その中心のカテゴリーが他のカテゴリーを巻き込んで全体を序列化しているからだ。この内的序列化の論理、あるいは経済学でふつつ再生産構造と呼ばれるものを、それらの相互規定関係、あるいは上向下向の編成におうじて叙述することは、何を副次的なカテゴリーで、何を規定的なカテゴリーとするかを識別し、カテゴリー間の重層性を解明する立場である。これなしには、変革とは何なのか?何をもち変革が達成されたとか、変革が不十分だと言えるのか?その深度を識別するうえでの決定的基準をつかむことができない。したがって、変革の弁証法を徹底しようとする、当該の社会の内的編成をどうカテゴリー的に規定するかという学的構成の弁証法へ移行せざるをえない、そう考えるべきではないのか?

このことをマルクスに即して解釈できないだ

ろうか、と私は思う。ただし、これは、著者に教えられた二つの弁証法の区別から刺激された一つの論点でしかない。著者の弁証法の整理に私は賛成し、この功績を高く評価したい。

## (2) 否定性の弁証法

さて、弁証法を二つに区分したうえで、まずは現実発展の法則としての弁証法を問題にしたのが第1章である。

一般に、ヘーゲルからマルクスへの弁証法の継承というとき、マルクスが『経済学・哲学草稿』の「ヘーゲル弁証法および哲学一般の批判」で取り出したのは、主として「現象学」の弁証法であった。「現象学」で主体は意識または自己意識であり、仮象の本質をその否認において確認するのがヘーゲルの「否定の否定」であると批判したうえで、肯定的なのは、この否定性の弁証法においてヘーゲルが人間の自己産出過程を外化と外化の止揚としてとらえた点であるとされた。

マルクスにあっては、外化と外化の止揚は、ヘーゲルのような思考活動ではなく、現実的な対象化活動（労働）において、しかも、現行の国民経済的な条件におかれた疎外された労働を生命活動へと連れ戻すことであった。この点は、資本のもとに従属した労働をどう歴史的に解放するかという弁証法として積極的に生かされる。

では、ヘーゲルの論理学のほうはどうなるのか？「唯物論的哲学の立場からはこれを省みる価値のないものとみなすべきか？（64ページ）。そうではないというのが著者の立場である。従来は、レーニンに従ってヘーゲルを「認識論的に読む」という立場が提起され、これに邪魔さ

れて、ヘーゲル論理学の認識論＝存在論の二重性は恣意的に解体されてきた。著者は一貫してこれに反対し、ヘーゲルの存在論のなかには、論理的なカテゴリーが存在の発展をも表すのだから、これを引き継がない限り、唯物論的摂取という見地からしても不十分だと述べている。

このような基本的見地から、著者は難解なヘーゲルの『大論理学』のとくに「反省論」へ分け入っていく。なぜここを取り上げるのかというと、実は、『グルントリッセ』と『資本論』の記述でヘーゲル論理学が生かされているという点を解明するためである。私はこの箇所はただ論理を追うだけで精一杯だが、観念論から虎子を得るために、そして、そもそも学の進展の方法、諸カテゴリーが前方へ、あるいは抽象から具体へ推展する叙述法を取り入れるために、ヘーゲルの反省論が役立つということであろう。

してみると、ここにも、著者の二つの弁証法の区別が貫かれている。外化と外化の止揚の論理は、物質的労働に置き換えれば歴史の弁証法として受け継げるが、それだけでなく、学の方法としての弁証法としても再評価されねばならない。けっきょく、資本と流通過程の総体性を資本の規定性においてつかむこと、資本とは「前提をみずから措定する自己前提」であることを学の方法の唯物論的改作として生かすという発見を著者は引き出した。

ここは本書でもっとも難解な部分（49～65ページ）である。ヘーゲルにとって思惟と対象の関係は現実の生成過程でもある。ここで、存在論的側面の「合理的核心」とは何かということとは問いうると思えるが、ヘーゲルにあっては、

精神が他在を反省し、自己のもとへ引き寄せる過程を現実の生成とつかんでいる以上、必ず歴史＝論理説の陥穽に落ち込むわけだから、ヘーゲル論理学の存在論的な「合理的核心」がどこにあるかを示すことは、観念優位の主体－客体の論理から脱出しない限り無理である。主体を、思惟する主体（自己意識）とせずに、資本とすること、そして資本が他の諸契機とのかかわりで「他在において自己のもとにある」自己同一性を貫くことを著者は論証していると思われる。

要するにマルクスは、ヘーゲル弁証法から歴史の弁証法への道と、学の方法としての弁証法の道を引き出した。こうした「合理的核心」を取り出して、あとはあっさり捨てた。

捨てられたものが何であったかは、中期後期にははっきりする。現実の生成過程と現実の内的編成は、マルクスにおいては、歴史と論理の関係として明確に区別されることになった。歴史論理説である（この点は、序章の最後の箇所ですら十分に分析されている）。

以上のように読んだが、私は、著者の「否定性の弁証法」理解から見ると、現代思想の領域における、アドルノの『否定弁証法』はどういう評価を下されるのか知りたい。むろん、本書に直接それを要求するのは筋違いである。だが無関係でもない。実はマルクスもアドルノと同様に同一性哲学としてのヘーゲル弁証法を批判している。マルクスは、「根源的統一性」(88ページ)を置かずに「否定の否定」を論じていった。これにたいしてアドルノは哲学的には「多元化されたフォイルバッハ」とでもいべき観照哲学に落ち着いたのではなかったろうか？いささか筆が滑りすぎた。ともあれこの部分は、

フランクフルト学派研究がマルクス研究とシンクロすべき宿題である。

### (3) 唯物論

2章の「マルクス唯物論の形成と特質」では、従来の、エンゲルスの、そしてロシア・マルクス主義的な唯物論の通説とはまったく異なる斬新なアプローチでマルクスの唯物論の形成過程が辿られる。

すなわち、その特徴は、フォイルバッハ・テーゼに準拠しながら、観念論への批判と、古い唯物論への批判、そしてあたらしい唯物論の規定へという筋道を通して形成される。

とくに、この筋道は、意識か実在のどちらに先在権を認めるべきかという、もっぱら認識論的で、社会分析と絡まない、観照的な唯物論との対比で説得力をもつ。言い換えると、著者は「これまでの主なマルクス研究のほとんどが『市民社会の Materialismus』を哲学的問題として扱ってこなかった」という正当な指摘をおこなっている。これが抽象的唯心論、抽象的唯物論の両極批判および古い唯物論への批判として、社会分析と絡ませて、唯物論概念が深化する理由になっている。実によみごたえのある部分である。

### (4) 意識論

著者は、次に、意識論に問題を絞り込む。ここでは、原理的にヘーゲルからマルクスへの意識論が問題とされる。私は、ヘーゲルの『精神現象学』も『論理学』も、ともに人間の意識と世界の関係において意識が発展していくプロセスを実に豊かに扱っていたこと、それにたいして、マルクス主義の社会意識論は意識が社会的

存在の関数であることを解明することにほとんどの精力を使い果たし、たいていは機構分析で終わる(それだけでも大変な労力なのだけれど)ことに避けがたい貧しさを感じてきた。貧しい「還元主義」と外からは揶揄される訳だ。しかし実は、丸山眞男の方法を継承しても描ききれなくなっているのが現代の複雑さである。こうした隘路の突破を含めてマルクス側から問題提起してくれないか?と内心期待して読んだ。

だが、当ては外れた。というよりも、当方の問題設定がいささか欲張りなのであった。まずここで扱われるのは、精神の多様性を歴史的に整序する方法の発展ではなく、ヘーゲルの下で幻影的に自立化させられていた意識が、『ドイツ・イデオロギー』で完全に粉碎される哲学的顛末、言い換えれば、唯物論側からの意識論の形成過程の論理的フォローなのである。

この仕事の正当性はまず認められねばならない。そしてその枠内で、意識についての反映論的アプローチとイデオロギー的アプローチの統一といった、著者ならではの見事なアプローチ間の整理もある(本書を貫く反スターリニズム的なスタンスにもかかわらず、著者は、「反映論の見解そのものは理論的に正当であって、保持されるべきだと考えている」(209ページ)と明言する。評者は、いささか、出鼻をくじかれた。マルクスの言う反映は *zurückspiegeln* で、マルクス・レーニン主義の言う反映は *widerspiegeln* だという区別を押さえた上で著者はそう述べている。)

とくに、「Xはaとして現れる」という論理、マルクスの物象化の論理の説明は非常に明快である。しかも、これ自体が弁証法であることを

著者は示している「Xはaである」と主張する者に、いや「それは本当はXである」と主張する者がいる。X = aとX = Xを同時に示すのが、形式論理学とは異なる、弁証法である。マルクスはそれを「Xはaとして現れる」と表現した。判定のためには、一体当の実体がXなのか、aなのか分析しなくてはならない。だが、これは或る意味で常に未完だ。マルクスの唯物論の立場は、X = aに対するX = Xの立場(啓蒙主義)を排し、Xが何故aとして現れるかを解明する立場である。これは、しかし、我々が日常おこなっている共感的な分析だ。たとえば、子供と大人の会話は常にそれである。「幽霊」に怯える子供に、あれは「枯れ尾花」がそう見えているのだと諭す立場である。理性ある大人は、「枯れ尾花」を排除しない。ともに恐れ、手を取り合い、「幽霊」を追い出す共同行動のなかでX = Xを臨床的に見つけだす。いわゆる先回りした知の側から威張るとか、無知な人民を指導するなどは論外である。スターリニズムには物象化論はないから、指導者と大衆の弁証法は作動せず、Xとaの弁証法は消えて、固定化される。

なぜ、どのようにしてXがaとして現れるのかというアプローチは、まずもってXがXであるということを解明した学知の人にしかやり通せない仕事である。凡人は、「aとして現れた」ところで生きているからである。しかし、aはさほど凝り固まったものではなく、不安定である。aの線で生きている者に共感的であり、同時に、aに出自する自己を批判的に解明する、この学知の側の誠実と欺瞞のぎりぎりを生きるのがマルクスの唯物論だろう。

私は、このことを解明しているのが著者だと

考えるけれど、そのうえで著者よりも反映論には懐疑的である。なぜなら、対象Xを反映するその仕方は反映論的な構図によっては解明できないからだ。対象Xが何らかの形で意識に反映すると言いうるためには、前もって、対象Xであることを特定していなくてはならない。ところが、Xをaとして受け取る者は、「客観的实在」を反映するどころか、矮小化し、転倒させて受け入れ、X=Xを排除している。Wiederspiegelungは対象の先在が意識にどう反映するかというふうに対象Xをつかんだ者から天下る論理だが、本当は、人間の意識というものはさほどはっきりしたところから降りてくることなどできないものなのだ。むしろaを突破したときにはじめてXが現れる、というふうにししか認識は進まない。ゆえに、Xは先行存在どころか、むしろ、闘争の帰結なのである。

マルクスの「生活が意識を規定する」(Zurückspiegelung)という把握は、対象の先行を言い立てない言語闘争論の地平で語られており、著者がススキが幽霊として対象を反映する(193ページ)というかたちで述べようとしているものとは、認識論的にも存在論的にもずれている(いわんや、マルクスの議論は、花田清輝的な自己表現と反映の表裏一体という議論とはすれちがっている)。

価値意識を含めて、生活の構造から発生論的にXとaの同時併存と闘争の問題を扱うべきではなからうか？

#### (5) 個人の問題

フォイエルバッハ第9テーゼによれば「観照的唯物論、すなわち感性を実践的活動であると把握することをしない唯物論が到達するところは、

せいぜいが、ばらばらの個人(der einzelnen Individuen)と市民社会(bürgerlichen Gesellschaft)との観照である」

この「ばらばらの個人」を超えることが、マルクスの全生涯の課題であった。それは、階級性や共同性にむけて越えるということではない。個人がはじめて個人としての生へ向かって超えることだった。この意味で評者は、著者の個人論は全体として画期的な論考と思う。史的唯物論が「個人発展の理論」を核心として含んでいるというよりも、そのためにこそ史的唯物論があったのだ。

この着眼を支えているのは、60-70年代の人類史の三段階把握である。「現代の問題意識から個人の位置を復権しようとする試みは...1960年代以降本格的に開始された(227ページ)」とすれば、マルクスの課題設定はほとんど我々と同じ視野にあったことになり、驚異以上である。ここから見て、著者の戸板潤へのコメントの的確さも了解できる。おそらく、戸板においてさえ、なぜ「自己一身」が前景化し、個人の問題が後景化したか？を考えてゆくと、史的唯物論における近代の位置づけの問題、したがって、戸板の人類史の5段階把握、あるいは階級闘争史論の影があろう。人類史の三段階論は、何よりも個人の析出というテーマに焦点づけられているが、教科書の5段階発展論のもとでは搾取論、せいぜい集団論しか見えてこないのだ。

著者が、「この点(個人発展の理論...評者)を解明することはいまだにすぐれて今日的意義をもつ課題だと考える」(223ページ)というのは、競争が個人の永遠の実現形態であると考えているネオ・リベラリズムの影響力を考慮すれば、なおさら明らかである。

ところで、「個人とは何か」という問題は、いわゆる近代主義のなかで長らく議論されてきたはずである。近代社会は、自立した個人の契約関係である、というような議論である。では、当の「個人」とは何か？ふつうは、Individual、Individuumと表現されてきただろう。英語は便利な言語だが、しばしば、重大な区別を無視して単純な言葉に詰め込む傾向がある。VerdinglichungとVersachlichung がともに reification になったりする。個人という重大な概念についても同様の傾向がある。アメリカ・フランクフルト学派ですら、「個人」は Individualのみだと思いこんでいる。英語のこうしたボキャ貧のために、私たちは戦後いっそうこの種の誤解を増幅してきた。これにたいして、マルクスはたいてい、近代社会の個人を Einzelneと呼んで、Individuumから区別する。それは『ユダヤ人問題によせて』から『資本論』までほぼ一貫している。

とすれば、近代社会の「ばらばらの個人 Einzelne」からアソシエーション社会の「連帯する個人 Individuum」へ転回することがマルクスにとって最大課題のひとつであった。

この点で著者が Individuum と Einzelne、Individuation と Vereizelung を必ずしも厳密に分離していないことに若干の不満は残る。しかし、著者は、社会の中での個別化 (Vereizelung) が「ばらばらな個人」の誕生であることをこれまでのどの類書よりも明確にしている。問題は、個別化された個人 der vereinzelt Einzelneから「自由な個性」への道行きである。

著者は、ここでも主として人類史の第三段階目の個人に依拠して、上記の歴史的展望を論じ

ている。さしあたり、若い読者にむけて、第三段階目の個人を想起させるにはこれで十分である。若い読者に、競争社会とは異なる個人という地平が開きうることを示すことは決定的に重要なのだ。

だが、私は、これだけではまだ弱い見取り図に終わると思う。ここでは詳しく論じられないが、『資本論』の労働日、協業、分業とマニュアルファクチャ、機械と大工業、蓄積論と領有法則の転回論で、「資本の生産力」の存立構造として、「ばらばらな労働者 (Vereinzeltarbeiter)」が資本のもとで相互の意志関係なしに、外的に結合されていることを論じた部分がある。見かけのうえでは人格的に独立し、しかし、それゆえに相互に関係することのない「分断された労働者」が強制的に束ねられることが当の労働者と全社会に驚くべき宿命を背負わせる矛盾、ここにこそ「近代的個人」のポジをネガ・ポジ的に巡回させて生きる側の論理、そしていわゆる「個人的所有」へ帰着する必然がある。「近代的個人は個別化された個人であるとともに、階級的個人なのである」(252ページ)ということの真意は、このように解されるべきであろう。

### 3. おわりに

以上、各小主題について私なりにコメントしながらまとめてきたが、本書の最大の功績は、弁証法を二つに区分し、それによってヘーゲルからマルクスへの批判的継承関係を明らかにしたことである。このことが貫徹されることによって、我々は唯物論、意識、個人について、これまでのスターリン主義にまみれた通俗観念から決定的に離脱できるばかりでなく、このこと



がより重要なことであるが、眼前の歴史の第二段階の新局面に向かって社会的かつ哲学的な目を開きうるようになるのである。本書は私の知る限り、欧米の哲学・社会学関係のどの類書よりも高水準にある。ソ連、欧米の哲学的な影響力のなかに先進資本主義国日本の現実からの思

想が突き刺さり、ハイブリッドな記念碑的労作が生まれた。このための30年として理解するならば、誰もそれを圧縮して生きることなどできなかったであろう。

(たけうち ますみ・桃山学院大学社会学部教授)